

第5回 社会的ひきこもり支援者

全国実践交流会 in 佐世保

～ひきこもる若者、この街 その街の支えと育ち～

第1日 受付 9:00～

9:30～11:00

基調講演

テーマ 『自分ひとり』からの出発

～窓を開けて、その向こうへ～

演者 服部 祥子

大阪人間科学大学名誉教授 精神科学

11:00～12:30

特別シンポジウム

テーマ 「若者支援政策の現状と課題」

シンポジスト 宮本 みち子

放送大学

佐藤 洋作

NPO 文化学習協同ネットワーク

コーディネーター 山本 耕平

立命館大学

13:30～17:30

テーマ別実践交流会

1. 就労支援と仕事おこし
2. 学校現場が求めた「不登校・ひきこもり」支援システム
3. 発達障害のひきこもり者支援
4. 家族支援の課題
5. フリースペースにおける若者支援
6. 精神障害とひきこもり支援

18:30～20:30 懇親会

第2日 受付 9:00～

9:30～12:30

ワーカー養成セミナー

1. ひきこもり「相談の倫理・技術」
2. ひきこもりの事例検討
3. 心理・生活アセスメント
4. 支援職員の力量形成

9:30～13:00

特別交流会 シンポジウム

「語りあい・学びあい・共感しよう

～今の私があるから、未来がある～」

2010年2月6日(土)

7日(日)

会場:アルカス SASEBO

〒857-0863 長崎県佐世保市三浦町2-3

TEL 0956-42-1111

(イベントホール・大会議室・中会議室・小会議室)

参加費:3,000円(学生2,000円)

懇親会:4,000円(学生2,000円)

※当日申し込みは各500円増しとなります。

事前申し込みは、所定の用紙にご記入の上、申込用紙記載の番号にFaxいただくか、ホームページからお申し込みいただけます。

<http://hikikomorishien.web.fc2.com/>

【主催】

第5回社会的ひきこもり支援者全国交流集会実行委員会
全国社会的ひきこもり支援連絡会議

【お問い合わせ先】

◆フリースペースふきのとう

〒857-0874 佐世保市京坪町 8-1

TEL 0956-25-6222

◆NPO 法人エルシティオ

〒8640-8319

和歌山市手平 6丁目 112-1 新堀作業所横丁内

TEL&FAX 073-432-2170

【申込み先】

フリースペースふきのとう

〒857-0874 佐世保市京坪町 8-1

TEL0956-25-6222・FAX0956-76-8131

※この集会は「支援者実践交流会」です。個別の相談に応じるプログラムはありません。

※守秘を大切にしつつ、個別の事例検討を行うプログラムがあり、参加を支援者のみに制限させて頂くことがあります。

※特別交流会は当事者と保護者の意見交流の場です。

テーマ別実践交流会 実施要項

1. 就労支援と仕事おこし

コーディネーター 原田 良太(社会福祉法人宮共生会 指定障害福祉サービス事業所しおさい)
共同研究者 田中 秀樹(社会福祉法人一麦会 麦の郷)
報告 隈元 佑輔(sports dreamer)
田中 智景(長崎若者サポートステーション)
藤井 智(NPO 法人文化学習協同ネットワーク)
舛元 淳子(NPO 法人ステップアップステーション 理事長)

《 趣 旨 》

公的支援としての若者サポートステーションが展開する就労支援と、障害者の作業所が地域における若者の就労を通じた社会参加支援につき報告をおこない、若者がそれらの支援によりどのように社会に参加する機会を得、力をつけているのかを明らかにする。

就労の為の技術(方法)獲得に力を入れる活動に参加する若者たちは、「ものすごくジャンプしなければならないのか」「背伸びが必要ではないか」「辛い思いをしているのではないか」といった意見が実行委員会で聞かれた。

今回、社会福祉法人一麦会や NPO 法人文化学習ネットワークに、共同研究者さらに報告として参加して頂くのは、多様な働き方を求める若者たちの充実した人生を保障する実践を展開しているからである。

さらに、経営者からの報告を求めようと考えている。これは、ひきこもりや障害のある若者の就労を保障している良心的な中小企業者は、若者のことを考え、彼らが社会に参加できることを願って雇用しようと考えている。しかし、その熱意と現実に彼らの就労を保障し続ける困難さの葛藤のなかで企業者自身が苦しんでいる。そんな時、ひきこもり支援者たちは、行政にどのような責任を求めていくべきなのか。この第1実践交流会で考えることは、山積みされている。

2. 学校現場が求めた「不登校・ひきこもり」支援システム

コーディネーター 高須賀 尚武(特別支援学級担当 小学校教諭)
共同研究者 小畑 耕作(和歌山県立きのかわ支援学校)
報告 西 直子(特別支援学級担当 中学校教諭)
(佐世保市行政担当者)
山田 高志(長崎県立佐世保中央高等学校通信制 教諭)

《 趣 旨 》

ひきこもる若者のなかに、小・中・高校の仲間集団に参加しづらかった人がいるのではなかろうか。それは、知的障害や発達障害が明確になっている。子どもだけでなく、なんとなく学級や学校に参加しづらい子どもたちとして支援者や大人に認識されたかもしれない。実行委員会では「なんとなくしんどい子どもたちのなかには不登校支援にのらない子どもたちがたくさんいる」「中3が特にきつい」といった現状が報告された。また、この子たちに「ゆっくりとしたスタンスで子どもたちと関わる必要がある」といった意見が出された。

佐世保で生じた子どもたちの不幸な事件に対して、行政が子どもの課題に横断的に関わる組織が必要であると考えつくられた「子ども子育て応援センター」から、行政が学校現場やひきこもり支援機関に求める課題につき提案を求めたい。また、学びへの要求を持ち通信制高校や定時制高校に参加しはじめるひきこもり若者たちにつき若手研究者や実践者からの報告を求めたい。

軽度発達障害者の支援学校卒後の学びたいという要求を保障する専攻実践に携わっている現職教員に共同研究者を依頼した。これは、学校と地域・社会との関わりをより明確し、学校がひきこもりつつある若者になにを果たすべきかを議論するためである。

3. 発達障害のひきこもり者支援

コーディネーター 山下 浩(佐世保市子ども発達センター所長)
共同研究者 楠 凡之(北九州市立大学教授)
報告 小柳 憲司(長崎県立こども医療福祉センター 小児心身医学(心療内科))
横石 たまき(NPO 法人バイタルフレンド就労継続支援 B 型事業マザーワート理事長)
北島 しず子(フリースペースふきのとう)

《 趣 旨 》

この交流会のコンセプトは、みえない障害ゆえに深刻化する家族間の葛藤と生活や社会参加の不安を議論することに求める。

広汎性発達障害などの発達障害の場合には、発達特性に応じたアプローチや生活・就労支援が必要となる。さらに発達障害の場合には、二次的に生じた情緒的、心理的問題、あるいは併存障害としての精神障害への治療・支援が必要となる。

この交流会では、支援の場における“みため”つまり、アセスメントについて議論されることを望む。“みため”なくして、その障害特性にみあった支援の展開は困難となる。この為、コーディネーターである山下医師から、発達障害の医学・心理的アセスメントに関して概論的に話して頂き、その後、支援者からの報告を頂きたい。なお報告は、「発達障害のある若者と仲間づくり」「発達障害のある若者と就労支援」等の報告が望ましい。

4. 家族支援の課題

コーディネーター 澤田 修(医療法人慶仁会 天神病院副院長)
共同研究者 高橋 幸江(福井県精神保健福祉センター)
辻田 (福井県精神保健福祉センター)
家族支援 中島 陽子(長崎県中央保健所地域保健課 保健師)
藤本 綾子(社会福祉法人一麦会 紀の川岩出地域生活支援センター)
不登校支援 井形 和子(フリースペース長崎・登校拒否を考える会)

《 趣 旨 》

ひきこもりは、家族のなかで何らかの課題解決が困難となった時に事例化することが多い。それまで家族は、閉鎖された空間である家族のなかで悶々と若者と関わる。しかし、その関わりは、家族構成員すべてにとって肯定的な結果を導かないことが多い。

家族が早期から相談でき、家族が地域の専門機関と共に若者と関わるために何が必要であるかを考える交流会とする。和歌山の地域活動支援センターからは若年精神障害者の親の会を組織する支援者に報告を受ける。彼女のところには「今から親を殺すといったナイフを持っています」といった保護者からの電話や「火をつける」といった当事者からの電話が毎日のように入る。その当事者、親とともに育つ支援者はいかにあるべきかを報告願う。また、精神保健福祉センターでひきこもり家族教室を運営する精神保健福祉士を共同研究者とし、佐世保で信頼される精神科医のコーディネーターに議論を進める。

5. フリースペースにおける若者支援

コーディネーター 一ノ瀬 裕海(フリースペースふきのとう 中学校教諭)
共同研究者&報告 古庄 健(社会福祉法人つむぎ福祉会 ゆうプラス)
報告 中村 尊(NPO法人フリースクールクレインハーバー)
鴻原 崇之(NPO法人エルシティオ)

《 趣 旨 》

居場所は、育ちあいの場であるが、あくまでも個別心理療法を提供する場ではない。また、居場所での仲間との関わりを通し就労支援への意欲を獲得することはある。しかし、居場所は当初から就労を目的とする実践を提供する場ではない。「自分は何になりたいのか」「どんな人生を歩みたいのか」を問い苦悶する若者たちが、居場所で同じ躓きを持ちながら一歩を歩む仲間と出会い、安心して「失敗」を繰り返すことが許容されながら、ひきこもりと向き合う主体性を育てるためには、強固なルールでがんじがらめになった場ではなく、できるかぎりあいまいさが保障された柔軟な場としての居場所が必要である。

大阪で居場所を運営している実践者に共同研究者になって頂き、佐世保のフリースペースに関わるコーディネーターとともに、フリースペース(居場所)が、若者たちに何を与えるべきか、ひきこもりはどのように運営されることが望ましいかを議論する。

6. 精神障害とひきこもり支援

コーディネーター 宮田 雄吾(医療法人カメリア 大村共立病院副院長)
共同研究者 野中 康寛(社会福祉法人一麦会 社会的ひきこもり支援連絡会議事務局)
報告 佐々木 喜美枝(精神障がい者家族の会「ゆみはり会」)
西村 多賀子(NPO法人チーム・フォー・バイ・フォー 地域活動支援センター)
佐藤 洋作(NPO文化学習共同ネットワーク代表理事)

《趣旨》

今回、初めて設定した交流会である。ひきこもりの支援現場で若者たちと向き合っている支援者たちは、精神障害を持たない若者のみ関わっているのだろうか。おそらく、支援者の前には、総合失調症や人格障害等の精神疾患や精神障害のある若者も多く訪れているだろう。支援者の前に現れる若者が共通してもつ社会参加のしづらさ(社会参加障害)に支援の場では何を行うべきであろうか。

アウトリーチと積極的に入り込めない公的相談機関は「本人が相談に来てくれないと支援できない」とあまりにも当たり前の反応を行い、まずは家族支援だと家族がひきこもりをつくる要因であり、そこにある病理的關係に焦点をあてようとする。家族は、その支援のなかで自責を強める。

精神障害をもつ若者が引きこもる時、当然、治療が必要となる。その治療と共に、彼らには、仲間のなかで自己肯定を高める取り組みが必要である。民間支援機関や障害者支援機関は、懸命に彼らの治療やリハビリを取り組もうとするが、障害者自立支援法は、その若者支援に有効に機能しているのか。決してそうではない。

この分科会では、「ひきこもり」という社会参加障害に対して、国は何を行うべきなのかを実践のなかから明らかにしたい。

《第2日目》

【ワーカー養成セミナー】 9:30~12:30

1. ひきこもり「相談の倫理・技術」／ 講師 高垣 忠一郎 (立命館大学)
2. ひきこもりの事例検討 / 講師 山本 耕平 (立命館大学)
3. 心理・生活アセスメント / 講師 楠 凡之 (北九州市立大学)
4. 支援職員の力量形成 / 講師 水野 篤夫 (財団法人京都ユースサービス協会)

【特別交流会 シンポジウム】 9:30~13:00

「語りあい・学びあい・共感しよう ~今の私があるから、未来がある~」

コーディネーター 宮崎 隆志(北海道大学大学院教育学研究院)
助言者 服部 祥子(精神科医)
シンポジスト 当事者 下田真奈美(フリースペースふきのとう)
野中 孝夫(NPO 法人エルシティオ)
保護者 辻 千穂子(フリースペースひまわり)
西川 末晴(NPO法人エルシティオ)